

中野三敏氏『江戸の板本』

渡辺守邦

近時国文学者による書誌関係の編著に多く出合うようになった。思いつくだけでも、井上隆明氏『近世書林板元総覧』（昭五六 青裳堂書店）、長友千代治氏『近世貸本屋の研究』（昭五七 東京堂書店）、鈴木重三・佐藤悟氏『近世書目集』（平元 日本古典文学会）、多治比郁夫・中野三敏氏『近世活字版目録』（平二 青裳堂書店）などが挙がる。恥かしながら島原泰雄氏と評者の共著『蔵書印提要』（昭六〇 青裳堂書店）もこの部類か。また、藤井隆氏『日本古典書誌学総説』（平三 和泉書院）もあつた。この風潮のよつてきたる所以は、さまざまに解釈が可能であろう。曰く、図書館人の関心が和古書から離れてしまった、書誌学者がエッセーの執筆に熱中している、物好きな国文学者が増加した、等々。そのいずれもが的を外していないと思われるが、しかし、そんな消極的な理由からばかりではあるまい。編著者に近世文学の研究者の多いところからして、研究の進展に即しておのずから必要を痛感した、一種の受益者負担としての書誌学もしくは出版文化への関与、という側面を見過すべきではあるまい。

本書は新古典文学大系の月報に連載した「板本書誌学談義」に

基づく。先年の古典文学大系の際、同じく監修者のお一人山岸徳平氏が月報に連載した「書誌学の話」をもとに『書誌学序説』（昭五一 岩波書店）をまとめられた響みに倣つたものという。考えてみれば書誌学への越境は、このころ始まつたのであつた。山岸先生の蔵書は、古書肆の売立目録にいたるまでの全てを、評者の勤務先が譲り受けて現在に至るが、図書館の特殊文庫室に、汗牛充棟のたとえそのままに積み上げられた姿は圧巻であつて、『書誌学序説』がけつして素人の手すさびではなかつたことを証言するかのごとくである。

本書の著者は近世文学研究者にして、また蔵書家の令名が高い。その文ぐらは山岸文庫に伍して劣らない規模を誇るのではあるまいか。それを本書の随所に挿入される図版が証明する。序に代えた「板本書誌学のすすめ」において著者は、書誌学を書物の物理学であり、実在の物を情報に代える技術と喝破するが、文章に数倍して雄弁に情報を伝えるのは、写真であり図版であることは論をまたない。もとより『書誌学序説』にも充分な図版の挿入があつた。そして例えば川瀬一馬氏『日本書誌学用語辞典』もまた豊富な図版を載せて特色とする。書物の物理学にとつて、図版は有効にして不可欠な要素であることができよう。しかし両書と本書との間には、図版として採りあげられる書物に質的な差がある。本書の図版は、「日常実用のごく普通本」であつて、いわゆる大名物の類とは無縁であろうとする。書物の見本を陳列するために図版を使おうとするのではなく、板本の何たるかを説明するために図版がある。

ここに本書の特色があり、本書執筆の目的も、一つにはそのあたりにあったものと思われる。つまり、江戸時代に「日常実用のごく普通本」であった板本も対象に、眼の付けどころを纏説しようとするのであるが、そこには著者の体験に基づく蘊蓄が、余すところなく披瀝される。その体験とは、つまり近世文学研究者としての著者の実践そのものであり、板本はつねに文学史や時代の趨勢に相対化しようとする意識のもとに扱われる。そんな例を一つ二つ挙げてみよう。

第五章を「分類」と題するが、その最初に、寛文・貞享・享保・宝暦の書籍目録に載る書目を使って、江戸の出版人たちの分類意識を探る。実は本書と全く同じ材料を用いて、同じことをやってみようとした試みがある。岡村敬二氏「江戸の蔵書家たち」(平八 講談社)であるが、ともに少なからぬページを使つて各書籍目録の小見出しを掲出し、その分析にまた少なからぬページを割くが、両者を比較してみるとおもしろい。まず岡村氏の分析であるが、時代を追って実用書の出版が勢いを増し、読者の広がり示すこと、とくに女性向け教養書が次第に増加して大衆化を實質的なものにするなど等がいわれる。一方、本書においては、たとえば貞享の目録から享保の目録への変化の挙げてみれば、「好色本」の立項が消えたことに享保の改革の影響を指摘し、「通俗書」の増加に中国小説の翻訳ブームを、「仮名物草子類」から舞の本が外されたことに文学史の動向を関連づけるなど、その分析は時代と文学に即して詳しい。また、書籍目録の分類に続けて、「地本の分類」への言及を忘れることなく、ほぼ同様のペー

ジを割いている点も岡村氏と相違する。

また、第六章「板本の構成要素」は、表紙や題簽など書物の体裁に属する事項を探りあげるが、洒落本に特有な更紗模様を用いた表紙に関して、「管見では」と断つたうえで、初見を安永二年の「宝合之記」とし、同じく「扉」の初見を万治二年の「万病回春」とするが、この種の年時を添えて始原を明らかにしようとするこだわりも、研究者としての姿勢と無関係ではない。凡百の書誌学概論にあつて、著者たちは、おそらくこの種の論議を回避するか、おぼめかしたままに済ませようとするはずである。なぜならば、新出資料によつて大幅に遡る可能性をなしとせず、ひいては著者の見識が疑われる恐れさえ否定できないから、である。

具体的な書名を挙げ、細かな年時を明示することへのこのこだわりは、本書の随所において試みられる大胆な試案や私案の提示と無縁ではなからう。例えば第一章「板本」というものの性質に六ページを費やして述べられる、大方の文庫図書館で実施されている、和本のコピー複写禁止措置への異議とか、第四章「装訂」における「大和綴じ」という名称の提案などがそれに当たるが、後者についてさらにいえば、「綴葉装」「列葉装」「列帖装」などと呼ばれて呼び名の定まらない現状を憂いての提言であろうとは思ふものの、しかし、混乱に追い打ちをかけるがごとき提案に首をかしげたくなるのが人情というものであろう。「紙を数枚重ね、一緒に二折して一折帖となし、斯くして得たる折帖数帖を、更に糸で合綴して一冊に仕上」げるといふ、江戸の板本にはほとんど例を見ないこの装訂に対する、さらに混乱を招きかねない提案な

のであるから。

しかば、その真意は何なのか——。これは著者の仕掛けたワナに相違ない。用語一つ統一できない現状を、書誌に関心を寄せる諸君、あなたは我慢することができるとか、読者に向かって問いかけているのではないか。先のコピーの件も同様である。軟構造の装訂と楮紙という強靱な料紙を用いる和本を、よもやコピーごときで傷むほどのヤワなタマだと思ったりはしないだろう。だったら、異版や別版の判定に無二の威力を発揮する和本のコピーを、解禁するように、声を大にして主張しようではないか、というのである。

ここに至って、本書の本質が明らかにになった。著者は三十年に及んだという板本との付き合いの結果学んだことの全てを、余すところなく開陳しようとしている。その知識は驚くべきもので、ここに一つひとつを記さないが、本書によつてはじめて知ったこと、あるいは気づかされたことの何と多いことか。しかし、そんなことで驚きたもうな。江戸の板本というのは、一個人の知見で覆いつくすことのできるほどの矮小な世界ではない。読者諸賢、よろしく不足を補い、欠くるを正して、ともに板本書誌学の樹立を志そうではないか——との、提言の書なのである。先にも触れた初出の書名や年時のこまかな明示も、これと無縁ではあるまい。

もしそうであるとしたならば、評者もまた、豈この挑発に乗らざるべけんや、である。実は和本のコピーに関して、図書館の司書と押問答したことがある。著者と同様の主張に対して、彼の返

事は、コピー機の発する光線に特殊な赤外線が含まれていて和紙を痛める、というのであった。苦しまぎれのとっさの思い付きだったかもしれないが、二の句が継げなかった。実験や実証に基づく理論武装が必要であらう。これはまた、広く書誌学における自然科学流の実験実証の必要性にもつながる。第七章「板本の版面」に、覆刻版が原版に比べて天地の寸法が数ミリ縮むことの指摘がある。これは、木村三四吾氏の卓見であるが、しかし、大本で五ミリ前後の差がある場合は確かに覆刻に相違ないが、困ったことに明らかに覆刻と知れるものの、寸法に相違がない例に出くわすこともある。寸法の縮みは板木か板下のどちらかに原因があつて生じるのであらうが、この点など、板本物理学のためにも、実験によつて確かめておく必要があるのではなからうか。

余勢をかつて、揚げ足とりに類する指摘を。第二章の図版8に載る「角力勝負附」は「取組」表であらう。墨によつて勝負が記入され、まさにその名に価するが、「近世風俗志」巻五にいう「勝負付」はこれとは別で、勝方負方を上下段に分ち、引分や預りを、段間に小字で組む。去年の七夕古典会に安永六年以降一括の出品があつたが、明治十年までが木活字を使う印刷だった。

その二は、揚げ足とりそのもの。「東叡王府蔵版」の「寛永寺宮」（二九七ページ）は輪王寺宮。寛永寺では「宮様版」と呼んでいると聞いた。

その三は第六章の丹表紙について。川瀬一馬氏「日本書誌学辞典」に立項があつて、慶長前半のごく短い期間に用いられた表紙のこと、寛永期のそれは朱色表紙と呼ぶべきものとされる。熟

柿を思わせる鮮やかな丹色表紙原装の寛永十三年誓願寺前八尾版『史記評林』を見たことがある。あれは丹表紙だろうか、朱色表紙だろうか。

(一九九五・十二 岩波書店 B 6 判 三五〇頁 三〇〇〇円)

新刊紹介

中嶋 隆著

近世文学叢書3

『初期浮世草子の展開』

仮名草子・浮世草子における小説とは

何か。従来置き去りにされてきたこの問いが、本書の序章だ。第一章「仮名草子から西鶴へ」。著者は両者の間にある断絶に注目する。そして、西鶴。「一代男」、「一代女」、「武道伝来記」等の武家物、「世間胸算用」をとりあげる。第二章「西鶴と」西村公は、著者の西村本関連論文の集大成。西鶴と同時代の作家西村市郎・右衛門未達を追跡、書肆であり作家でもあった未達をトータルに描き出す。第三章「西鶴没後の作者と浮世草子」。書肆にして学者、漢文学をよくした林義端。数奇な運命をたどつ

た浮世草子作家都の錦の家系と、今はケンブリッジ大学に収まる彼の新出浮世草子。演劇的趣向を盛んに取り込んでいった西鶴没後の浮世草子の諸作品。書誌解題・伝記研究・新資料の紹介——本書は「実証」を駆使し、仮名草子・浮世草子における小説性に鋭く切り込む。

(平8・5 若草書房 A5版 四六八頁 九八〇〇円)

(井上和人)

一海知義・池澤一郎注

『江戸漢詩選2 儒者』

本書は江戸漢詩選シリーズの一冊。収録されている詩人は、古文辞学を唱えた荻生徂徠、儒者・政治家として多大な功績を残した新井白石、中国古代の音韻研究に名を成した山梨稻川、昌平黉教授で寛政の三博士の一人に数えあげられた古賀精里という

江戸時代を代表する碩学鴻儒たちである。

儒者の詩と聞いて私たちはどのようなものを想像するだろうか。術学的なもの、あるいは教訓臭を帯びたもの、また「全篇四書五経で凝り固めたような代物」(池澤氏)であろうか。しかし池澤氏は言う。「典拠や用字の難解さをくぐり抜けさえすれば、我々の隣人のような親しげな面貌を呈するものが少なくない」(本書解説)と。

本書の懇切丁寧な語注と口語訳に助けられて、これらの儒者の詩を味読するのも、楽しいことではあるまいか。なお、池澤氏には、本書と関連して、主に精里の詩に詳注を試みた「儒者の詩情」(『近世文学研究』と評論 49、平7・11)の論考のあることを付け加えておく。

(平8・5 岩波書店 B5判 三一九頁 三八〇〇円)

「又 淳」